

廟^{ミヤオ}を過ぎ行程約十二里新河驛^{シンホエイ}に入る。

歲暮の所
感

山丹城

明れは十二月三十一日、熟く故國を思ひ來れば、迎新の用意既に成りて、千門萬戸松竹連り、忙中尙ほ新たなる希望の曙光に滿さるゝ時なるに、天涯の孤客、只漠々たる山河の間を辿りて朔風に暴露し、一事の耳目を慰むるものだに無し、豈多少の感なからんや。さはあれ國を出で、既に一百十餘日、身は尙ほ支那本部の一隅に在りて未だ目的地に一步だも印せざる予は、前途を豫想して奮勵一番、忽ち進取の意を振起し、頓に萬里孤客の旅愁を忘れたり。劉樞寨^{リュウシュウサイ}、居安舖^{キウアンブ}、二十里堡、十里堡を経て山丹城^{シヤンタン}に到る。此地は人家百數十を有し、官衙には縣及遊擊等の衙門、學校には蒙學堂三、外に縣衙門内なる高等學堂一は、其の學生皆秀才にして、四十名を收め、軍隊は僅に五十餘名ありと。輸出品は鴉片、石炭を主とし、鴉片は年額十數萬斤、石炭は一日約千斤を産し、輸入品は我國のもの其大部を占め、南清品之に次く、燃料は主に北方よりの木材、石炭及び穀稈、馬糞等を混用し、飲料は井水、河水共に可なり。少時休憩の後、龍王廟^{パンチャ}、邦家舖^{パンチャ}、樂定堡^{ロウジンブ}、黃家庄^{ホワンチャ}を過ぎ、行程約十一里、東樂城^{トシロウ}に着す。

地形は數日來幅約一里内外の波狀地に屬し、山丹の西方龍王廟に於て、南北の低